手術時に於ける患者顔面部の・・・ ・・・被布接触除去装置に就いて

北海道大学医学部第二外科教室

(主任 奥田義正教授)

大 山 正 信
高 田 芳 朗

Upon a Non-contact Apparatus of Facial Cover of Patient during Operations

Masanobu Oyama, Yoshiro Takata

The 2nd Surgical Clinic of Medical Dept., Hokkaido Univ.

(Chief Prof. Dr. Y. Okuda)

緒 言

手術時患者頭部に於ける被布の除去に就いては種々なものが工夫されている。手術台に附属しているもの或は手術台と別個に頭部及び顔面部に置かれるもの等種々な装置が考案されている。それらは一長一短あり未だ満足のゆくものを見ない。吾が教室に於てはシメルブッシュの仮面マスクに類似したものを作製して日常用いているが仮面の金属棒が顔面に触れ、且ある程度の荷重圧迫を加える不快感があり、位置の安定性がない等の欠点がある。簡単便利な手術用顔面頭部に於ける被布の除去装置を試作したので御紹介する。

本装置の構造

図1. b. に示す如くこれは(a) 可動棒, (b) 垂直支柱, (c) 水平底脚より構成される。その各部に就いて

図1. b. 略図説明

略述すると

(a). 可動棒,
鋼鉄製, 直径6.
5 mm の円柱よ
り成り, ニッケ
ル塗金をほどこ
す。縦33cm,
横30 cm の矩形
の棒であり, 24
cm と6cm の境
界部で支柱に支

図1. a. 実物の立体的写真

持され, 前者を長棒, 後者を短棒と云ひ一側の支柱に止めねじがあり垂直支柱に対し任意の角度に位置して固定し得る。回転可動範囲は360度でありその操作は極めて容易である。

(b). 垂直支柱. 鋼鉄製, 直径7.5mmの円柱と黄銅製, 直径10mmの円筒とより成る。前者は内管と呼び後者は外管と呼び, 内管は外管の中に入り上下に移動し得る。外管の高さは28cmで支柱外管の水平底脚より22cmの処に蝶ねじがあり, 外管には内管の移動した任意の位置で固定する。内管を移動し支柱最低32cm最高44cmとなし得る。支柱の水平底脚と交わる部に於て90度屈曲装置がほどこしてある。

(c). 水平底脚. 横に長いH字状をなし支柱基部に連絡する平打ち鋼が平行している。この平行平打ち鋼は支柱基部に於て直角位に連絡しその長さは15cmである。平打ち鋼の厚さは3.2 mm, 幅15mmでいづれもニッケル塗金が施されてある。又平行平打ち鋼の間を一本の平打ち鋼が横走り底脚を更に強固にしてある。更に本装置の特徴の一つは可動棒の長棒部を支柱側に向い折畳み, 又水平底脚を同様支柱側に折畳み保管, 携帯時に利便するところ大である。(図4)

図1. c. 上及び下
可動棒の角度変換

図 1. d. 支柱の延長

本装置の用法

(1). 仰臥位手術, 全身麻酔操作を要しない場合(図 a. b.) に示す如く支柱部を患者の頭頂部にし可動棒長棒を顔面上に位置する. 偶々嘔気, 嘔吐を催し何等かの措置を講ずる必要に迫られても支柱を上方に延長することに依り操作が容易に行われる.

(2). 気管内麻酔又は点滴エーテル麻酔を施行するような場合は図3の如く支柱を伸ばし可動棒の長棒を適度の角度で挙上する事に依り実施出来る. 従つて麻酔の操作をしながら瞳孔の状態, チアノーゼの有無等常に患者の状態に就いても容易に観察出来る.

(3). 側臥位で手術する場合にも本装置の利用が可能である.(図2. c.)

(4). 其の他本装置は手術時頭部の被布を除去する

図 2. a. 可動棒長棒顔面上にある

図 2. b. 図 1. a. の被布遮断

図 2. c. 側臥位

図 3. 可動棒長棒頭頂部に向ふ
(並びに可動棒の角度変換)

のみならず多人数収容の病室等では唯一人の患者を光源から遮断し光の刺激から避けんとする場合等に使用し得る利点がある. その他術中輸血, 点滴輸液, 血圧測定時等に本装置を応用して被布を除去するに便利である. 又氷嚢吊し等にも利用可能である.

図 4. 平板上に折畳んだ状態

本装置の特徴

使用法に於て既述したところであるが之を要約するに

(1). 手術時完全に患者頭部の被布を必要範囲に遮断し被布の顔面に接触する不快感を避け顔貌状態を観

察し得る。

(2). 支柱を上下に移動し、可動枠の角度を自由に交換固定する事が出来麻酔操作に支障なく術中の偶発症状に対する処置にも容易に応じ得る。

(3). 頭部、顔面部の被布接触遮断の他に四肢の部位の処置に際しても被布遮断に利便する。又遮光の目的にも利用出来る。

(4). 折り畳んで 34m×38cm の平板状になし得る。総重量 930 g にして保管携行に便利である。

(5). 組立操作簡単で誰にでも容易に使用し得る。

〔附記〕 吾が教室では実際臨牀例に於て気管内麻酔を

要する食道癌手術其の他仰臥開胸術に使用し又側臥位胸廓成形術其の他腹部手術の仰臥位に本装置を使用し何れも何等の不便を伴うことなく使用し得た。又病室に於て遮光の目的を以て本装置を使用し多大の利便を得た。

結 語

手術時患者頭部及び顔面の被布接触除去装置の必要を痛感し使用簡便、各種処置に応用可能な装置を考案した。本装置は其の他にも用途がある。

(稿を終るに臨み本装置の考案を命ぜられ且試作上種々御懇篤な御指導御教示を賜わつた恩師奥田教授に厚く感謝の意を表する。)

陶 宮 閑 話

「式」

告 天 子

○何も求めず只今ここを楽しみ天地の修業をすべきなり。粗食し水を飲み脰を曲げて枕とする中にも真の楽みはあると聖人は云ふ。世の中は腹をすかして茶漬めし、なんにもなしにさらりさらりと食はるる事こそ、あらまほしけれ。晋の陶潜と申す人は五斗の米の為に腰を屈するよりは天命を楽んで又奚ぞ疑はんやとて歸去来の賦を作つて官にも仕えず、身をも嘗まず世を忘れて暮せりと云ふ。それまでは学ばずとも古人と今はものちがひある故、時代の風にしたがひ、なるべく情慾の念を去り、求めなき、まかせて通る身こそ心安けれ。「陶要集より」

○孟子の浩然の氣を養ふとは我が云ふはがらかな陽の徳を養ふの意にて陶宮の氣質を取去る修行の要なり、氣質は天理にそむき己れの運を破り障るなりと知るべし。

○古き文に、ある人、朝鮮の役に軍用金乏くして黒田如水軒に金子五拾両を借り、無事帰陣の後返金せんと黒田の宅に参上致しける。折ふし到来とて鯛一枚を家来持出し、披露しける。如水云、三枚におろして身の処は塩にして貯ふべし、骨の部分は此人にも我らにも食べきせよと申しける。彼人心中に扱きて吝嗇なる事哉と賤しく思ひたり。さて彼五拾両金を返さんと差出し厚く礼を述べければ如水軒この金子を更らに受取らずして曰く、我ら始めより此金子進上申上げし積りなり軍用に立ちし上は費えに非らず金限の徳我に於ても満足至極なりとて終に堅く辭して受けざりしとなり。是を以て俟と吝かとの別を判然と知るべく則ち「滋」の龜鑑とすべきなり。陶話に歸は十二の子を生むと云つて「滋」も十二宮の頭にて皆是より生れ出したるにて洵も第一にすべきなりと教えられたり。

(註) 陶宮では十二宮と称し、性格を十二に分類し滋結演豊奮止合老緩墮煉実といふ。宮とは人身の尊称である。

○癸丑の頃米夷の来襲騒ぎあり、都下騒擾を極む、人あり謂曰く、先生既に致仕せられ都内もし大変に及ぶとなれば逃避何れとも心に任せて譴責はなし羨むべき哉と。陶祖之に應じて曰く、予の思ふところは然らず予の如きものと雖も命ありて使役に充てらるれば進んで鋒鏑を犯さんのみ敢て逃避せず、予め矢石に死する命ならば身は山林に遁るるとも豈能く独り横害を逃るべけんや、思はざるの甚だしきなり。其人釈然として失言を恥ぢしと云々、真に御心掛の程感服、大丈夫の御志、言葉の端にあらわれける。

○文武訓に昔右大将頼朝の時、筑後の守俊兼甚だ美しき小袖を一着なし出伺せるを頼朝見給ひ自ら彼が脇差をとりて小袖の襟を切り捨て仰せけるよう、千葉常弼、土肥の二郎真平等武に長じたる者文に疎しと雖も常に儉約を意とし家富み多くの家来を扶持す。今汝が祿彼れの類に及ぶや否や知らざるも、文才にたけたりとも是非をわきまへず華美を好み儉約を忘却し、財産運用の法を知らざる点を大いに叱り戒めたり。同席の諸侯の輩是を聞きたましひを消したりとぞ。

○春三先生(陶祖の高弟)は生家極く貧なりければ提燈のひこを引き内職を常としたるも今は福人となりしを陶祖其修行をいたく褒められて

てうちのひこに引けるおくらしも 今のはるか昔とぞ三つ